

編集室

* 年一度の会誌編集委員の新旧交代シーズンになりました。私も、会誌編集委員会のワーキンググループ A の主査についてからちょうど1年となりました。ワーキンググループ A の副主査と編集委員の皆様のおかげで、何とか初年度の務めを全うすることができました。特に皆様からは、それぞれの本職が忙しいにもかかわらず、暖かい協力と献身的な努力を頂戴して大変感謝しています。

* 先日の会誌編集委員会で退任される編集委員のあいさつがありました。その中で若手の方から「会誌の仕事は、学会の仕事の中では最も面白いものでした」という発言に感ずることがありました。さすがに去る人の弁として余裕があり、うらやましくすら感じました。一方、締切に追われて、ひたすら編集の仕事を無難にこなそうとする自分の姿もわびしく見えます。どうやら、良い編集をするためには、使命感のみならず、仕事を楽しむ余裕もないといけないようです。

* 何しろ、世の中には、面白い仕事など、滅多にあるものではありません。

* では、会誌編集のどこが面白いのか？それは、まず会員の皆さんにとって面白い会誌とは何か、という問題から始まります。着任直後に、幾たびかこの問題について考えたことがありましたが、なかなか満足のゆく答えがなくて、いつしか忙しさに紛れて、面白い会誌作りの志も楽しみも忘れかけていました。

* ここで、一年の編集作業を振り返ってみることで、よ

うやくその答えが見えたような気がします。まず、面白い会誌の基準は恐らく人によって十人十色でしょう。同じく面白い会誌を目指しているといっても、記事の計画から編集までは編集委員それぞれの専門、人脈、感性等が強く影響しているため、メンバーの顔ぶれ次第で全く異なるものになってもおかしくありません。一方、だからこそ、自分のイメージどおりの会誌作り、ひいては学会作りの可能性が秘められています。また、自分の分野のアピールにとどまらず自己表現の場として活用できるという意味でも、ほかにない格好の立場に恵まれています。偉い先生が多くおられる学会活動の中では、若手研究者がこれだけ自分の色を打ち出せる自由さ、また自らの手によって学会の姿を変えていく実感は、最も面白いと言えるのではないのでしょうか。

* 会誌は、学会の顔であります。学会の将来は、若い会員の肩にかかっている以上、その顔となる会誌にも若さの輝きがあふれてしかるべきでしょう。若手編集委員が面白がって作っている会誌こそ、若い会員に一番魅力的なものになるに違いありません。したがって、これからの会誌作りには、若手編集委員に大胆な発想力と果敢な行動力を存分に発揮して頂くことが欠かせません。

* 今年度は、新任の編集委員たちの情熱に期待すると同時に、せめて自分としては、もっと会誌編集という仕事の面白さを味わいたいものと思います。

(編集特別幹事 趙 晋輝)